

## 押しボタン式信号機を新設 園児が渡り初め

上厚真地区の市街地に押しボタン式信号機が新設され、最寄りの宮の森こども園の園児8人が12月28日、渡り初めを行いました。

押しボタン式信号機は、地域住民の要望を受けてJAライスセンター前の通学路に設けられました。苫小牧警察署員や町公式キャラクターのあつまくんが見守る中、園児は歩行者用信号のボタンを押して左右の安全を確認し、手を上げて笑顔で横断歩道を渡りました。



手を上げて横断歩道を渡る園児たち

## あつま災害エフエム閉局 感謝で締めくくる

胆振東部地震後の平成30年9月20日から、被災者支援情報などを中心に放送を続けてきた臨時災害放送局「あつま災害エフエム」が12月29日、2年3カ月の情報発信の幕を下ろしました。

放送には、町社会福祉協議会や町内の中学生なども携わり、放送回数は延べ約1,400回におよびました。開局当初は、給水や炊き出しなどの生活情報を発信し、被災者に声で元気を届けました。また、生活環境の変化に伴い、放送内容もイベント情報や町からのお知らせ、身近な出来事、天気、音楽番組などへと変化。時にはリスナーからメッセージと一緒に思い出の曲のリクエストも寄せられ、新たなコミュニケーションも芽生えました。

最終回は、3人がパーソナリティーを務めて1時間放送しました。全国から寄せられたメールや事前に収録した町民の声も紹介。3人は目頭を熱くしながら「2年3カ月間、ありがとうございました」と声をそろえ、感謝の気持ちを伝えました。



リスナーに感謝を伝え  
放送を終えたパーソナリティーたち

## 企業研修型協力隊 菅原文子さんに委嘱状交付

町は1月6日、札幌市出身の菅原文子さん(62歳)に企業研修型地域おこし協力隊の委嘱状を交付しました。

菅原さんは、道内の金融期間に就職後、家族の仕事で渡米。帰国後に大学院に進むなど経験も豊かです。町内の企業で、町特産のジャガイモ(メークイン)を使ったお菓子など、商品開発や販売の拡充を目指します。宮坂町長は「チャンスを見逃さず、大きな事業に成長させてください」と話し、菅原さんは「町のPRにもひと役買いたいです」と話しました。



委嘱状を手にする菅原さん

## 地域おこし企業人 大矢仁さんに委嘱状交付

町は12月7日、新潟県出身の大矢仁さん(30歳)に地域おこし企業人の委嘱状を交付しました。

大矢さんは、愛媛県内の大学院を修了後、株式会社森のエネルギー研究所(東京都)に勤め、現在、北海道営業所の副所長を務めています。被災木を活用した循環型エネルギー利用の構築や森林再生に係る業務などに携わります。宮坂町長は「時間はかかりますが、森の復活に向けて技術提供していただきたい」と語り、大矢さんは「森の価値や復元力にも焦点を当てて活動したい」と話しました。



委嘱状を手に意欲を燃やす大矢さん

## 社会福祉法人北海道厚真福祉会 新施設が完成



完成した北海道厚真福祉会の新施設

胆振東部地震で施設が被災し、新町地区に移転改築していた社会福祉法人北海道厚真福祉会(岩筋雅弘理事長)の新施設が完成し、入所者約90人が12月20日、隣接する大型福祉仮設住宅から引っ越ししました。

新施設は、同会が国や町の補助を受けて約26億円をかけて建設しました。特養棟と障害棟で構成された棟続きの建物で、鉄筋コンクリート造り地下1階地上2階建て延べ約6,100㎡。特養棟には特別養護老人ホーム豊厚園(定員80人)、障害棟には厚真リハビリセンター(同50人)とあつまデイサービスセンター(同18人)が入りました。室内はバリアフリー構造で、渡り廊下で両棟を行き来することができます。窓からの自然採光も多く、居室や廊下に木材を使った明るい室内は、落ち着いた雰囲気にも包まれています。

また、一般の共同浴室に加え、車いすなどで入浴できる機械浴室のほか、ゆったりとした空間で歩行訓練などができるように、機能回復訓練室が今回新設されました。地震直後、道内に分散避難した入居者たちは、大型福祉仮設住宅への引っ越しを経て、被災から約2年3カ月ぶりによりやく落ち着いた生活を取り戻しました。

12月16日には、ひと足早く宮坂町長や渡部議長など町議会議員が施設内を見学しました。三浦康弘総合施設長は「コロナ禍のため、当面は家族と入所者が接触できませんが、入所者が安心して暮らせるように全力を尽くします」と話しました。



入所に先駆け施設内を見学する  
町長と町議会議員